

第2講：77「栗の節句」

教祖は、ある時、増井りに、

「九月九日は、栗の節句と言っているが、栗の節句とは、苦がなくなるとのことである。栗はイガの剛いものである。そのイガをとれば、中に皮があり、又、渋がある。その皮なり渋をとれば、まことに味のよい実が出て来る。人間も、理を聞いて、イガや渋をとったら、心にうまい味わいを持つようになるのやで。」

と、お聞かせ下された。

以上の逸話を、四つの視点から考察した。一つ目は「栗の節句とは苦がなくなるとのこと」、二つ目は「栗はイガの剛いもの」、三つ目は「心にうまい味わいを持つ」、そして四つ目は「栗の節句」の今日的意義についてだった。以下にそれぞれの視点について記す。

1. 栗の節句とは苦がなくなるとのこと

毎年、旧暦の9月9日は、古くから五節句を締めくくると「重陽の節句」とされている。味覚の秋、菊薫る秋ということで、「栗の節句」または「菊の節句」とも言われる。

そもそも五節句とは、季節の変わり目に邪気を払い、無病息災を願う伝統行事の一つで、1月7日の「人日の節句」、3月3日の「上巳の節句」、5月5日の「端午の節句」、7月7日の「七夕の節句」、そして9月9日の「重陽の節句」である。

古来、中国では奇数が縁起の良い「陽数」とされ、陽数が重なる日はなお縁起が良いとされてきた。さらに「9」の数字は最も大きな「陽数」とされ、9月9日は重要な陽数という意味で「重陽の節句」と言われる。これは日本でも同じように考えられ、「9」の数字は一桁の数字の中では最も大きい数字で、しかも奇数であることから、「9」が何桁も続く数字は縁起が良いとされている。

そのため、「栗の節句」ともいわれる9月9日の「重陽の節句」は、1年で最も幸せが訪れる日とされている。栗ご飯を食べ、菊酒を飲んで盛大に祝宴がおこなわれてきたこの日は、ある意味、それまでの苦勞から解放される日と考えることもできる。まさに「栗の節句とは、苦がなくなるとのこと」なのである。

2. 栗はイガの剛いもの

サボテンやバラなどのトゲ（棘）は、外敵から守り、水分の蒸発を防ぐ効果があるとされている。栗のイガ（毬）や周囲のトゲも、同様の効果があるとされ、自分自身を守るための堅い“盾”と“矛”の機能を果たしている。イガは、栗にとって身を守るための堅く強く、トゲトゲしい存在、まさに「剛いもの」なのである。

ところが、人間の心にはイガやトゲのような“盾”と“矛”は必要だろうか。むしろ、人間には、他人を威圧するようなトゲトゲしい心の“盾”と“矛”は、無用ではないだろうか。「剛いもの」すなわち“盾”や“矛”の心は、「陽気ぐらし」世界にもそぐわないと考える。葡萄のような「丸い心」（『稿本天理教教祖伝逸話篇』135「皆丸い心で」）をもつことの方が重要だと考える。

いずれにおいても、「イガをとれば、中に皮があり、又、渋がある。その皮なり渋をとれば、まことに味のよい実が出て来る」というお話は、私たちが持つ自分の癖・性分を、素直に見つめ直すことを促されている例え話ではないかと考える。これは、癖・性分を見直し、「丸い心」をもつならば、「まことに味のよい実が出て来る」と諭しておられるように思う。

また、「どんな辛い事や嫌なことでも、結構と申すてすれば、天に届く理、神様受け取り下さる理は、結構に変えて下さる」（『逸話篇』144「天に届く理」）とあるように、不足せず勇む心で望むならば、「まことに味のよい実が出て来る」のではないかとも思う。これが「陽気ぐらし」世界へ続く道ではないだろうか。

3. 心にうまい味わいを持つ

「人間も、理を聞いて、イガや渋をとったら、心にうまい味わいを持つようになるのやで。」の意味は、イガや渋のような個人の癖・性分を「丸い心」に切り替えることが大事であり、そのことが結果的に心暖かい味のある人間になる、と諭しておられる点にある、と先述した。

しかし、「心にうまい味わいを持つようになる」の解釈には、別の解釈も考えられる。毬栗のトゲ、堅固なイガに手こずりながらこじ開けたとしても、今度は硬い鬼皮に阻まれる。さらに全身を覆う渋皮を剥かない限り、美味しい栗の実にはありつけない。栗を食べるには、このようにイガ、皮、渋の段階を経なければならぬ。これらの経緯を思い浮かべながら、ありがたく頂戴するのも大切なことだ、という解釈である。

4. 「栗の節句」の今日的意義

増井りんは、明治10年頃から、教祖の「日を定めて勤めるよう」とのお言葉で、「おやしきづとめ」を始め、明治12年からは教祖のお守役を仰せつかった。また、りんは入信以来、教祖より「針の芯」のお許し、「息のさづけ」「あしきはらいのさづけ」「肥のゆるし」等、数々の重い役割をいただいていた。

明治13年秋頃、教祖から篤い信頼を得ていたりんに対して語られたのが、「栗の節句」のお諭しである。また明治13年9月22日（新暦）には転輪王講社の開筵式が執り行われ、同年同月30日には初めて鳴物をそろえてのおつとめが行われた。翌明治14年、5月上旬にはかんろだい石出しひのきしん、9月下旬にはかんろだいが2段まで出来上がるなど、かんろだい建設に勢いがついていた。

さらに、「こふきを作れ」との仰せにより、山澤良治郎、喜多治郎吉らも、教祖のお話を記す作業に専念していた。加えて、明治14年までには大和国や河内国、大阪や京都など、あちこちでたくさんの講が結成されたように、教勢の拡大は止まることはなかった。

このような教勢拡大の中にあっても、今回の「栗の節句」の逸話が示すように、しっかりと教えを心におさめることの大切さ、「心にうまい味わいを持つ」ことの重要さを、教祖はあえて増井りんにお諭しされたのではないかと考える。特に、教祖のお守役で信頼の篤い増井りんへの心のこもったお諭しは、当時40歳間近のりんにとっても、重要な意味をもっていたと思われる。

もちろん、今日を生きる私たちにおいても、この親神様からの重要なメッセージを、重要なお諭しとしてしっかりと受けとめなければならない。

勢いづいている時にはつい忘れてしまう心のゆるみ、他者への無配慮など、「栗の節句」にはこのような戒めの意味も、込められているのではないかと考える。